

VII 特殊幼児および治療教育に関する研究 ××××××××××××××××

優秀児の考え方の特徴

愛育研究所 多田淑子

村山貞雄

第一に、鈴木ビネー式テストのスケールのうちあらかじめ限定した範囲のなかで各問題の通過率を生活年齢を基準にして比較したばあい幼児期における天才児と普通児のちがいは、全体的な発達の遅速だけであつて通過率のカーブは同じ傾向なのかそれともちがったものなのかという問題をとりあげた。

数の観点については、①幼児期の抽象的な数の観念は天才児の方がしつかりついているが、具体的なものの数の把握は天才児も普通児も同じように発達していくということ、②十までの数の観念は普通児も割合早く把握できるが、それ以上の数を把握することは天才児の方がずっと早いということ、③簡単な計算は知能の高低そのものより訓練による進歩が大きくみられるということ が言える。

記憶について言えることも数の観念と同じで、単に機械的なもので意味のないものの記憶は天才児が早くからずれているが、文章の反唱など意味のあるくだけたものの記憶はそれほど天才児と普通

児にちがいが無い。

言語的なものは、天才児が四、五歳でぐつと高くなるのに比べ普通児は六歳まで低く七歳で高い通過率をしめしている。発達のしかたがある時期で急に上昇する点など似ているが、伸びる時期がずれていると言える。

生活経験からの適正な判断をみるものとしてとりあげた了解問題は、五歳あたりから天才児・普通児共に通過率の高い問題であり、通過率の点ではあまり差がなかった。

以上、知能テストの問題の通過率から生活年齢を基準にしてみればあいい、天才児が特に高いものは抽象的なものの考え方、記憶、色の名称などで、普通児が天才児と同じまたは天才児よりよかつたものは、日常生活から直接把握できる具体的なものの考え方、たとえば、銭の名前、左右などである。発達のしかたも問題によって異なるが、単に全体的な発達の遅速だけでなく、殆んど同じように伸びるもの、一・二年のずれはあるが同じようなカーブで伸びるもの、一方は徐々に一方は急激に伸びるものなどがあるように思われる。

第二に、知能年齢が同じものを比べたばあいい、天才児と普通児との間に知能内容の相異があるかどうかという問題をとりあげ知能テストの解答内容を分析し検討した。身近かなものの定義のしかたは、知能年齢が同じ場合、生活年齢は天才児の方がずっと小さくてほとんど普通児と傾向が似ている。しかし用途による定義をした

ものは普通児より天才児に多く、見たままの感じや形態的なものや定義と関係のないことをいうものは普通児に多かった。また普通児は知能年齢即ち生活年齢が五歳と六歳ではその定義の内容に進歩がみられるのに、天才児では知能年齢五歳と六歳でその内容に余り変化がみられなかった。ものの比較のしかたは、全般的に天才児の方が高度であることがわかった。またいろいろの角度から比較を考えているものが天才児に多いという結果も得た。生活場面での適正な判断(分別)のしかたは、はっきりした差はみられなかったが、普通児の方が適切な解決法をのべているばあいが多く、天才児は積極的に解決しようと考へてはいるが対策が単純なものが多かった。

以上のことから同じ知能年齢でも物の定義、比較のしかたなど内容からみると天才児の方がずっと高度の考へ方をしていゝこと、普通児より天才児の方が多角的なものの考へ方をしていゝこと、普通児は知能年齢が大きくなるにつれてその内容も徐々に高度になるものが多いのに天才児はそれがあまりめだたないということなどがわかった。(大会発表論文抄録64―67頁)

知的優秀児の特性に

関する基礎研究(第六報告)

(一事例による行動分析と追跡を中心として)

東京家政大学

森 重 敏

上原万里子

伊藤 礼子

目的 従来の基礎研究の一環として、われわれが扱った問題児としての一優秀児の発達、行動、およびその変容過程を追求し、指導上の一手がかりを見出すとともに優秀児一般の特性研究に対する一事例を検討する。

手続 [I]問題の生起 論文抄録に記載したように、J・Oが五歳六か月の時、われわれの児童相談所へ来所した両親の訴えに始まる。いろいろな反社会的行動のために皆に嫌われてそれまで二か所幼稚園をやめ、近所でも同様な理由で遊び相手を失ってしまった。

[II]基礎資料の蒐集 (1)面接記録による家庭環境、生育歴 (2)母親の日記(Jの質問記録) (3)幼稚園での観察記録(時間見本法) (4)同園での身体的、心理学的検査の結果 (5)卒園後の追跡的資料。

結果の概況 (図1、2、表1、4は大会発表論文抄録62、64頁を参照されたい)

[I]相談時の診断と指導 WISC知能診断検査の結果、IQ一五九で知的優秀児と診断、できるだけ知的刺激を軽減して理解ある幼稚園へやることを指示したが、親の希望で四月より本学の付属幼稚園の年長組へ入り、家庭の協力を得てJの研究と指導を行なった。

[II]事例研究の結果 (1)家庭環境——父(33才)は東大大学院出身で某私大勤務、母(29才)は旧制高女専攻科卒で親子三人、児童中心でJのために住居を三遷した程の教育熱心、しつけ態度も理的で自主性を重視するが知育面への比重大。(2)生育歴——始歩期は一三か月、特記すべき病歴なし。(3)身体状況——外見丸顔で幼児らしい形態、体格普通。小さい身長割に胸囲大、運動能力は懸垂を除いて一般に普通以下(抄録表2・図2)であるが、打叩検査成績は最高(抄録表3)。(4)知能状況——先述のほか田中ヒネー法でIQ一七五(最優)。(5)人格的特性——全般的に明るくユーモアに富み人なつこ